

人間学における「共同研究」学習 －参加型学習方法の試み－

羽 場 勝 子

はじめに－ 20 年間の「共同研究」を振り返る－

I. 上智短期大学の人間学

II. 年間計画と共同研究

1. 取り組みの準備
2. 共同研究の日程
3. 共同研究のテーマ
4. レジメ集作成と発表合宿
5. 評価の方法

III. 共同研究の学習内容：テーマ

IV. 学生の評価

まとめ

1. 共同研究のメリットとデメリット
2. 参加型学習方法としての共同研究
3. 今後の課題

はじめに－ 20 年間の人間学 I 共同研究を振り返る－

本学ではいよいよ本格的にカリキュラム改訂に取り組み始めた。2003 年度から専門教科目（英語）の改訂が行われるが、これが一段落すると基礎・教養科目に取り組みたいというのが大方の意見である。その見直しの中で基礎・教養科目の中で唯一の必修科目である人間学についても検討されるであろう。

本学では、人間学の担当教官（現在 5 名）が年 2～4 回集まって、授業報告と年 2 回実施する講演会の打ち合わせをする連絡会を開いてき

た。開学当初は、私達担当教員は、必修科目としての人間学を教える意識が高く、相互の経験を持ち寄って、授業内容にまで突っ込んだ討議をしていた。しかし、最近ではテキストを共有するものの、実際の授業は各教員の責任で自由に行なわれているのが実情である。

私は、これまで人間学（または人間科学論）を三つの大学・短期大学で教えてきた。学科は、英語科（英語学科）、法律学科、看護学科と社会福祉学科である。セメスター制をとる大学では、半期2コマ7回とか3コマ4回という授業形態を体験した。人間学は学生の経験、関心などが土台になるので、授業内容、授業方法は各学科で特色があり、工夫が必要だった。同じ授業内容を看護学科と社会福祉学科の学生にして、片方に感動を与え、他方には「つまらない」と評価された苦い経験もした。英語学科と法律学科の経験も同じようであった。

上智短期大学生に役立つ人間学とは何か。これが、私が人間学を教えるようになってからの最大の課題である。

私の手元に「人間学共同研究」という冊子が26冊ある。これは、本学が創設（1973年）されて以来人間学を担当してきた私のクラスが、5年目（1977年）から「共同研究」学習を取り入れ、合宿して発表し合ってきたレジメの記録集である。このレジメ集が私の上智短期大学での人間学の実践のすべてを語っていると思っている。

本論文は、共同研究を中軸に行なってきた私の人間学授業のこれまでに分析し、今後の課題を探すことを目的としている。

I. 上智短期大学の人間学

本学では、開学（1973年）当初から人間学を一般教養科目の必修科目として位置付けている。人間学は、上智大学が1968年の大学紛争の後に新しく導入した必修科目であり、上智短期大学も大学に倣って開学当初から必修科目として定めたのである。上智大学では、それまで必修科目であった「宗教学」「倫理学」「哲学」を「人間学」という授業名に統一し、人間理解を新しい角度から行なおうとする試みが行われていた。私の専

門は教育学、中でも教育方法学であったが、本学開学当初から人間学も担当するように招かれた。開学から3年間は、上智大学人間学研究室からハイメ・カスタニエダ教授（現本学学長）が本学の人間学も担当された。人間学をどう教えるのかについて、カスタニエダ教授をはじめ上智大学人間学会や人間学研究室の諸先生に直接教を請い、本学の人間学担当教員同士で体験を分かち合ったりして授業を工夫した。

幸い、上智大学人間学研究室では、早くから人間学のテキスト作成に着手し、上智短大でもそのテキストを採用した。教員間の研究会も盛んであった。人間学の授業方法として講義ばかりでなく、学生が積極的に参加する討論や合宿が有効であるとよく話題にのぼっていた。私が上智短大で人間学合宿を始めたのは、そのような研究会での経験者の勧めによるものであった。

人間学を教えて3年目を迎えた頃、本学の人間学の問題点がようやく見えてきた。それは、大きく分けると2点に絞られ、人間学の教授方法と授業内容の多さに対する対応であった。

このことに対して説明を加えたい。

1) 人間学の教授方法

人間学テキストの「まえがき」には、
「自分自身を形成することの呼びかけを受けている人間は、環境と共なる存在、すなわち世界内存在なのである。人間は自分を取り巻く具体的な世界、文化によって特徴づけられた自然世界の中で、まさに成長していくのである。」（「人間学入門」ハイメ・カスタニエダ 1975）とある。人間学は、知的な成長と共に人間的な成長が期待される教科である。大学生はゼミや卒業論文指導によって人間的にも学問的にも成長するといわれるが、残念ながら本学にはゼミや卒論指導がない。研究合宿もなかった。サークル活動も活発ではない。私は、何とかして人間学の授業を通してゼミや合宿の楽しさを本学の学生に味合わせたいと思った。人間関係で孤立してしまった学生には、合宿は時には人間関係を修復するいい場所を提供し、人間学を通して人生のテーマを探し、連帯感を深めるい

い機会ともなることができると確信するようになった。

2) 授業内容の多さに対する対策

二つ目は、人間学のテーマの多さである。人間学のテキストは3回改訂されているが、その都度取り扱かう内容は増えている。

本学で使用している人間学のテキストの構成は、次の通りである。

- I 外側からみた人間理解
- II 内側からみた人間理解
- III 環境とのかかわり
- IV 深みの次元とのかかわり

私は、「人間理解」の部分前期、「かかわり」の部分後期に分けて教えてきたが、本学が女子の高等教育機関であることを踏まえると、どうしても「女性学」についてテーマの一つに入れる必要があると思った。特に、1975年は国連婦人年であり、それに続いて「国連婦人の10年」となった。わが国でも、大学・短期大学のカリキュラムに女性学に関する授業を入れる動きがあった。そこで私の人間学では、Ⅲのテーマの一つに「女性」を加えることにした。

これらの内容を1年間で学習することは、至難の業であった。特に後期で扱う内容は、今の学生の人間形成に必要なテーマであるだけに、何とかして学生が概要だけでも掴み、自分の問題として心に留めて欲しいと願った。この理由から、私の人間学のクラスで採用し、20年以上続けてきたのが「“かかわり”に関する共同研究」である。

授業内容が人間の“かかわり”に関する知識だけではなく、実際に社会やクラスの仲間と“かかわって”学ぶことによって、体験的にも“かかわり”を学ぶことを意図としたこの共同研究は、私の本学における「人間学」の欠かせない要素となったのである。

II. 年間計画と共同研究

本学に入学する学生のうち、キリスト教信徒はプロテスタントを合わせても毎年平均5名前後であり、キリスト教主義高等学校の出身者も多

くはない。大部分の学生は、本学に入学するまで、人間学を理解する準備教育を受けてきていない。理論的には、高校の「倫理社会」で学ぶはずであるが、この教科は受験に関係しない教科である為、生徒は余り関心を持たずに、短大に進学してきている。

本学に入学した学生は、人間学を未知で新鮮な授業として受け取るようである。青年期は誰でも人間について考えようとする。しかし、自分について考えることに慣れていない多くの学生にとっては、まず、その手がかりとなる人間学のテキストが難しすぎるという。この点について最近学生から益々指摘されるようになった。前期は、人間理解についてのテーマ（人間の由来、意識、自由とモラル等）の説明に、ビデオ教材やエクササイズを使って理解できるようにしている。自分自身と対面することに当初は面食らっていた学生も、だんだん慣れてくると、かえって自分について考えることを好むようになった。

後期のテーマは、“かかわり”である。人間を取り巻く様々な関りについて考察するのであるが、受験勉強の枠内に生活してきた学生達にとって、社会や宗教の問題に対する知識と関心は個人差が大きい。私は、後期の“かかわり”の授業内容を共同研究と講義によってこなすように構成している。本論のテーマである共同研究については、それを成功させるためには、4月からの準備が必要である。ここで最近行っている取り組みについて報告したい。

1. 取り組みの準備

共同研究の導入は、まず4月の人間学オリエンテーションの時から始まる。「人間理解」と「人間のかかわり」が切り離せないことを話し、前期に学ぶ「意識」とか「自由」のテーマが後期のテーマに密接な関連があることを自分で発見するように促す。

夏休みには、二つの作業をすることにしている。一つは3日間の社会参加と、他は後期の共同研究の準備として参考資料を2冊読むことである。

社会参加に関しては、以前は「ボランティア活動」と呼んでいたが、ボランティア活動はあくまで、本人の自由意志からの行動であるべきで、この場合はボランティア活動ではないとの学生の意見があり、最近では「社会参加またはボランティア活動」と呼ぶことにしている。夏休みに、授業期間にはできない社会との関わりを深める活動を最低3日間体験し、報告書を書き、後期の最初の授業で発表する。「社会参加」という名称を加えたことで、学生達の実践が多様化してきた。学生の中には、社会との関わりを知る一番いい場所はアルバイト先であると言うが、アルバイトはこの対象にしないことを前もって話す。多くの学生が参加している「家庭教師ボランティア活動」もここに入れない。学生は、夏休み中に、普段の学生生活では体験できないことをする意味を理解し、自分にとってそれは何かを探すところから宿題が始まる。保育園、老人ホーム、ゴミ拾い、町内会、母親のしているボランティア活動など身近なところに目を向ける。最近では自分の祖父母の介護が増えてきている。老人ホームでの実習を考えているうちに、自分の祖父母の介護を思い付き、家族のかかわりについて反省をしたという例が増えてきた。この報告は、後期最初の授業に行っているが、この体験発表から共同研究へと繋がっていくケースもある。

準備の第二は、共同研究に関する文献を夏休み中に2冊以上読むことである。共同研究のルールとして、私の方から次の条件を提案し、授業がスムーズに行く時は、夏休み前に仮のグループを作成する。

1. テーマは、原則としてテキストのⅢ、Ⅳ及び女性学の中から決める。自分たちが掘り下げたいテーマを選択する。資料の有無で左右されないように注意する。
2. 研究期間は2ヶ月半だけ（夏休みを含めると4ヶ月）なので、大きなテーマを選ばない。漠然としたテーマではなく、具体的なテーマとする。
3. グループ内での協力がうまくいくために、メンバーは3人～7人とする。2人だけのグループは作らない。8人以上になった場合

は、2グループに分ける。

4. 他のグループへの変更は、正当な理由があれば後期の第1週まで認める。その場合は文献資料を前もって読む。

以上の準備により、後期は、社会活動報告の後で、テーマとグループを決定する。

2. 共同研究の日程

共同研究がグループとして実際に始まるのは、10月に入ってからである。仮グループの話し合いで具体的なテーマを絞り込むと他のテーマに移動を希望する学生が毎年出る。この場合は、グループ構成が条件に合えば、認めることにしている（2名以下のグループは不可）。そして、グループのテーマとメンバーを確認した上で、研究を始める。最初の2、3週間は、共同研究やテーマへの関心がばらばらで研究は進まない。その期間は、前半を私が授業をし、後半をグループ作業とする。そして、最後の10分間は、グループの進捗の発表時間とした。共同研究にとって、この最後の発表は大切な時間である。最初の時間からグループ間に差が出るので、熱心なグループの発表は、クラス全体に刺激を与える。グループ研究をどのようにするか分からないグループにとっては、この発表からよい示唆を得る機会ともなる。何よりも教科担当者である私にとっては、各グループの進捗を掴み、適切なアドバイスの材料を得る絶好の機会であった。授業時間の流れは次のようになる。

- 後期 第1週 ボランティア・社会参加の発表
- 2週 テキストⅢの導入・共同研究のグループ最終決定
 - 3週 自然（授業）・共同研究（先行研究）
 - 4週 女性（授業）・共同研究（先行研究）
 - 5週 国家（授業）・共同研究（テーマの決定）
 - 6週・7週・8週 共同研究（研究活動）
 - 9週 共同研究（レジメ作成・発表準備）

11月25日過ぎの月曜日 発表合宿

12月第1週 共同研究・発表合宿の反省

本学では、11月10日前後に文化祭を行なうので、それが終わって2週間後の月曜日に合宿を行い発表をしてきた。

3. 共同研究のテーマ

共同研究においては、テーマとその決め方が重要である。それによってその年度の人間学全体のよしあしが決まると言っても過言ではない。学生の基礎教養に役立ち、社会的問題に眼を開くようになり、しかも学生が研究の楽しさを味わうことができるテーマを設定することが重要である。今までの経験から、テーマ設定に十分な時間を割いて、学生に話し合わせる必要があると思われる。特に“恋愛”とか“結婚”など、18、9歳の女性が一番関心を持つテーマを選ぶ場合には、漠然とした関心ではなく、具体的に何を知りたいのかを明白にしないと女性雑誌の内容の域を脱しないものになり易い。この段階で安易にテーマを決めて“義務”を果たそうとするグループを見つけて、じっくり話し合い、共同研究に意欲を持たせるのが、この時期の教員の重要な使命であると思う。クラス全体として“かかわり”のテーマが偏らないように調整するが、偏った場合には、学生のテーマを変更するのではなく、12月、1月の講義で修正する工夫が必要である。

学生が取り上げた共同研究のテーマは、1981年から2000年まで、1986年と1988年を除き、18年間の合計は214テーマで、1年の平均は11.8であった。(1986年の共同研究は総合テーマを「差別」とし、差別に関わるテーマを選ぶこととしたので、この年のテーマを除外した。1988年は私の研修年であった。)上智短期大学では、人間学の授業は、クラスを二つに分けて授業は25名から30名の規模で行なっている。従って各クラスが6テーマずつで、1テーマ4～5人ずつになっている。

過去20年間の共同研究のテーマを多い順からあげると次のようになった。

生と死 (45) 家族 (34) 国際連帯 (27) 自然 (22)

差別 (19) 女性 (17) エロス (12) こども (11)
宗教 (11) 対話 (7) コミュニケーション (4)
キリスト教 (3) 国家 (3) その他

この共同研究のテーマを分析すると、毎年取り上げるテーマと、その年の社会的な問題を学生たちが取り上げたテーマとに分かれる。毎年取り上げたテーマとしては、

生と死	家族	国際連帯
自然	差別	女性

があげられる。

また、社会的問題からのテーマとしては

こども 差別事件 エイズ 環境問題

などがあった。英語科の学生は、概して社会的な問題に疎く、結婚、家庭、生と死の意味などのテーマを選び易いが、毎年クラスの中に、社会問題に関心のある学生がおり、彼女たちがリーダーとなってクラス全体を引っ張ることが多く、国家や国際的な連帯性のテーマが加わり助けられた。

4. レジメ集作成と発表合宿

私の人間学の授業で、共同研究を採用したのは1976年の4期生からである。発表は合宿形式を採用した。発表の為に作ったレジメ集の数々は、25年間にわたる人間学の記録集でもある。最初の年から83年までは手書き印刷で、学生自らが製本をしている。84年からは手書き原稿であるが、短大事務部が印刷・製本をしている。ワープロで原稿を打ち始めたのは1990年からである（Iグループのみ）。2000年のレジメ集は、ほぼ全部のグループがコンピューターのワープロ打ちとなっているが、一部個人の分担箇所が手書きにされている。

このレジメ集の原稿提出日は、合宿の10日前を目処に決める。学生は、研究合宿の2週間前には自分達の研究をまとめなければならず、週末を利用したり、泊まり込みで集中的に勉強して仕上げる。このような

グループ作業を通して、友情が深まり、研究の面白さに夢中になることが多い。しかし、時には他のグループが熱中しているのを見て、焦りと苛立ちからグループ内で対立が生じたこともあった。

合宿は、上智短大のキャンパス内にあるセミナーハウスかクラブハウスを利用してきた。短大校舎から数分で利用できる両施設は合宿の為には便利である。曜日は、以前には週末を利用してしたが、最近は週末を授業で潰されることを嫌がる学生に譲歩して、月曜日の放課後から火曜日朝までにしている。これは、合宿で徹夜する学生たちの事を考え、アセンブリアワーと人間学の授業がある火曜日の前日を選んできた。合宿の当日は、午後4時45分に集合して午後5時より発表を開始し、夕食や入浴時間を極力短縮してすべての発表を終える。その後で、以前は学生有志がリードしてクラス全体の打ち上げパーティを開いてクラスの団欒を図っていたが、数年前からは、小さなグループに分かれて打ち上げをするようになった。

研究発表は、各グループの発表時間（質問時間も含める）を20分と決め、その時間内で発表が収まるように準備をさせる。学生たちは調べたことを全部発表したが、20分では少ないと言うが、“20分”という時間の長さを学ぶためには良い機会となる。原稿（レジメ集）を読むだけに終始することのないように注意し、事前に発表を工夫する時間を用意することにより、20分の制限を守ることが出来る。学生からの質問は少ないが、質問時間を使って教師が発表を補足する。発表毎にB6版のコメント用紙が配られ、学生は各自「研究内容・方法・発表方法・提案」についてのコメントを書く。

研究発表をした次の授業で、グループの補足発表とグループの反省会を開く。発表に不十分さを感じて補足発表を希望してくるグループに時間を割り、10分以内の発表を許している。グループの反省・評価は、先ず、研究発表の時に書いた学生のコメントに目を通してから、グループ毎で反省をする。この反省は、授業の最後にクラス全体に発表する。

5. 評価の方法

共同研究において、学生たち自身が評価し合い、実際に多くのことを学ぶ体験をねらって、共同研究では、次のような評価の時間を何回か設けている。

①共同研究の発表直後の評価（コメント）

学生たちは、共同研究で各グループの発表を聞いた直後に、簡単にその発表について評価と提案を書く。評価内容は、研究の内容、方法、グループの協力についてである。この評価を導入する前には、学生たちは、発表を聞くだけで、疲れたり、飽きてしまったりしたが、コメントを書くようになってからは、発表を意識的に聞くようになった。この評価の記録は、後に各グループに名前を切断して配布するが、学生同士の評価に素直に耳を傾けようになり、反省の材料をそこから取るようになった。

②グループ研究に対する担当者の個人評価

合宿が終わった次の週までに、個人評価を書く。最近では、

1. テーマの絞り方と決め方
2. 研究内容について
3. グループ協力について
4. おなじテーマで来年も研究するとしたら改善する点
5. 発表方法について

のテーマで行っている。この評価により、教員は各個人がどのくらい共同研究に関わることができたかを知ることができる。また、グループでの協力の程度や、グループ内で起きた問題などを知ることができる。

③グループ評価

グループ研究の次週の授業時にグループ評価をする。まず、発表時にクラス全員が書いたコメント（名前を切断）を読み合い、教員が準備した評価項目に従って評価する。この個人評価は全体的によく聞いて書いてあり、学生たちはそのことに感動する。励ましの言葉ばかりでなく、中には相当厳しい批判も入っている。既に個人評価を経験している学生

は、様々な意見を感情的に受け止めるのではなく、そこからいい示唆を引き出そうとする姿勢がみられるようになった。

Ⅲ. 共同研究の学習内容：テーマ

1) テーマの決め方

共同研究は、学生が主体となって進めていくので、人間学の学習内容とレベルは、ひとえに学生が行う研究の質による。高校時代にこのような共同研究の経験をしなかった学生にとって、テーマを決める時点から、ていねいな指導が必要になる。テーマを明確に定めないと、学生たちは資料に流され、簡単に結論を出して満足してしまう。特にインターネットを使うようになってからは、インターネットの文言を切り取ってそのままレジメに貼ってしまうケースが出てきた。テーマによって資料を選ぶのではなく、探した資料によってテーマを合わせるというケースもあった。

私は、それまでの経験からテーマを決める段階での指導に特に時間を割いてきた。テーマの設定には、それ迄のレジメ集が役にたった。レジメ集は、先輩達が同じテーマをどのように自分たちの問題としてとらえ、研究を進めてきたかを知るよい資料となった。それを参考にしながら、今年度のテーマを設定するチャレンジ精神を励まし、“自分達らしいテーマ”に発展するように導くことが重要である。テーマの決定には、グループによる時間的な差が出てくるが、この時期は忍耐強く待つことが教員に要求されるのである。

2) 内容の変化

人間学は、その性質上、多様な学問の進展、時代の変化を総合的に受け止め、授業に反映しなければならない。従ってこの25年間にテキストも、これまで4回改編が行われ、書き換えられている。従って、共同研究のテーマが変化したのも当然であろう。今回、レジメ集を整理して学生たちが時代の変化を敏感に受け止めていることがよく分かった。

その一例として、「死」の問題を取り上げたい。「生と死」のテーマは、

全クラスで取り上げられた。このテーマを選んだ学生は、10年間平均でクラスの24.6%で、最後の1999年と2000年には3分の1となっている。しかし、内容を見るとその年に社会的に話題となったテーマに絞られている。過去10年(1991-2000年)間のテーマを上げると次のようになる。

- 1991年 ガン告知 現代の死
 - 1992年 AIDSについて エイズ 尊厳死
 - 1993年 いのちの尊厳とは(ホスピス) 生と死(エイズ)
 - 1994年 AIDS ホスピス
 - 1995年 がん告知 ホスピス SUISIDE
 - 1996年 安楽死にまつわる問題 生と死について
 - 1997年 Brain Death 死を前にした人々の心理 死生観
 - 1998年 自殺の部屋 生徒と死(自殺)
 - 1999年 ホスピス 脳死と臓器移植 死の分類 自殺
 - 2000年 日本人の死生観 脳死と臓器移植 生と死-尊厳死 生と死
- 上の表から学生が取り上げた「死」のテーマが2通りに分類できる。

死生観等の時代的な背景に左右されないテーマや自殺という青年期に学生の関心が最も高いテーマと、ガン、ホスピス、エイズや脳死などの時代的な背景からくる死の問題をテーマにしたものである。私は、学生たちのレジメ集を分析して、同じテーマでもその問題がどのように扱われているかの細かい変化を読みとることが出来た。この事を詳しく説明するために、「エイズ」研究を例に取り上げてみる。

エイズ問題は、現在でも世界的な問題であるが、日本社会に大きな危機感を与えたのは80年代後半からであった。共同研究として取り上げられたのは92年であった。そして、それから3年間が日本のエイズ問題が短期間に変化していくことが分かる。学生たちが取り上げた内容を要約すると次のとおりである。

a. 92年

92年には、両クラスがテーマとして取り上げているので、2グループ（計10人）が発表している。その内容は

Aグループ：エイズとは。感染後の体に表われる症状。世界におけるエイズの現状。日本の現状。エイズは予防できるか。秦野保健所訪問。

Bグループ：十代の若者。日本のエイズ危機。

b. 93年

エイズの概要とその実情。エイズへの偏見。エイズと共に生る人々

c. 94年

エイズとは何か。エイズの症状。感染経路。感染者の数とアジアの実態。その予防法。コンドームの使用法。感染者の延命法・治療薬。世界に広がるエイズ撲滅運動の輪。

92年の研究では、主にエイズに関する理論研究であったが、3年後になると、日本でも罹災率が50人に1人の時代に突入したことを報じ、「このクラス（50人）に1人のエイズ患者がいる時代」といかに日本でも社会問題になっていて、自分達の問題であるかと説いた。コンドームを実際に発表場に持ち込んで、使用法を説明した。世界旅行が容易にできる現代、多様な性理論が飛び交っている中に生きる学生たちにとって、エイズ問題はもう彼等の身近な範囲内に到達していることを実感した。そして、もし、私がエイズ問題を取り上げたなら、病気に対する知識と世界の現状の説明に留まり、学生たちがしたような迫力のある授業にはならなかったと、学生の立場からの問題意識の違いをこのエイズ研究で教えられた。今の学生にとって、エイズに関する知識も必要であるが、それ以上に、エイズが既に自分の生活圏に届いていることを理解し、それにどう対処するかが大問題なのである。私は、共同研究のよさをこのような研究を通してしばしば体験することができた。

IV. 学生の評価

3 回の評価を通して、学生たちは、共同研究から何を学ぶべきかを自然と体得しているようである。合宿後の感想文（1999 年 2000 年）の中から拾ってみたい。

- それぞれの内容が濃く発表もよく分かりやすかった。…この「発表がなければ自分は学ばなかったであろう分野に、目をむける機会を得たことに感謝している。
- 今回は興味を持った分野ばかりでためになった。これからの私たちへの課題や見直さなければならない点を考えさせられた。自分の中であいまいにしていたものなどはっきり理解できた。ここであげられた問題のこれからも続けて着目しようと思った。
- みんな良く調べていて興味深いものでした。研究内容が重複しているものがいくつかあったので、重ならないテーマでいろんな事を知りたかったです。
- 今回の発表を通して人間に一番必要なのは愛だと思った。子供の時に十分な愛を注がなければ大人になると必ず不十分なところが出てくると思った。
- 命についてしっかり学ぶと言う授業を今まで受けた事がなかったので、日本は死、命についての教育が遅れているのだと思った。日本での少年・少女の自殺が多いのは Death Education が送れている証拠だと思った。

このように学生全体の評価は概してよかった。しかし、中には共同研究がうまくいかない実際を指摘する記述もあった。

- Death Education の説明が分からなかった。
- （市民の役割と国際連帯性）私には遠いテーマで聞いていて難しかった。ヨーロッパのことだけでなく、もっと日本のことも説明して欲しかった。
- 皆がやりたいことを尊重した分絞込みが足りなかった。

- ・ 自分がいかに勉強不足であるかが分かった。本を読むにつれどんどん知らないことがあることに気が付いた。
- ・ 皆からよかったと言われたが、研究のレベルよりも、皆に人気のあるテーマだったかもしれない。
- ・ わざわざ合宿をしてまで発表する意義が認められなかった。
- ・ (グループ) 協力が全くなかった。無責任なメンバーが多かった。

その他、毎年学生から改善の余地があることが指摘され、反省の材料となった。研究内容が専門的すぎたりすると、聞く学生たちには理解できない。研究のレベルが低いと学生の関心を呼ばない。学生たちは、共同研究を経験すると、内容が浅い発表を見破ることができるようになる。このような経験を次の年に生かすために、1998年からは、評価の中の一項目として、「来年もするとしたら改善する点は何か」を加えてた。

- ・ とにかく本を読み、講演会を聴き、自分で考え、知識を増やしたいと思った。
- ・ いくら研究してもしたりないので、もっと多くの本を読み、たくさんの死生観に触れたいと思う。
- ・ 子育てをした人の経験をもっと聞くべきだ。
- ・ もっと両親や祖父母に意見を聞いて参考にしたらよかった。また、直接幼児の母親と触れ合って研究すればよかった。
- ・ (アメリカの少年犯罪の資料が足りなかった。) もっと早くテーマを決めれば資料を集められたと思う。

これらのアンケートは、次年度の共同研究を始める時に、学生たちに伝えるようにしている。

多くの学生は、この共同研究の後、もう一度共同研究をしたいと言う。この言葉を聞くことが、私にとって一番高い評価だと思っている。短期大学では、レベルの高い研究はできないかもしれないが、指導の仕方によっては、研究の面白さを体験させることができるであろう。

まとめ

1. 共同研究のメリットとデメリット

共同研究を始めて既に 25 年以上が経った。レジメ集や評価のアンケート記録が、私の人間学授業の実践記録となって残った。ここで、2000 年までの記録をもとに、共同研究のメリットとデメリットを探り、私が学生と共に築いてきた共同研究を評価し、今後の課題を探りたい。

a) メリット

共同研究のメリットは次の 6 点に集約できると思われる。

- 1) 研究の経験のない学生たちが、グループで研究することにより、ある程度のレベルのある研究をする体験ができた。
- 2) テーマを決めるところから学生が主体的に研究に関わるので、集中して研究し、学生ならではの研究が多く生まれた。
- 3) 教師は、共同研究の進行具合を毎週の授業でチェックすることができる。このチェック機能が働かないとき、学生の研究が貧弱になることが多かった。
- 4) 共同研究をすることを通して、クラスのメンバーが仲良くなった。英語科の場合、勉学を通して友情を深めることが難しく、孤立する学生が出やすい。しかし、人間学の共同研究では、クラス全員が必ずどこかのグループに属するのでこの弊害を解消出来ると思われる。特に発表合宿では、学生たちが共同研究をした満足感を共有してクラスの所属意識を倍増した。2 年生になっても、グループでの活動（例えば文化祭や愛好会）に喜んで関わっていった。
- 5) 共同研究では、本学卒業生の協力が大きかった。導入時に共同研究について話すと、学生たちはまず授業方法に戸惑い、なかなか概要がつかめないうのである。その時役立つのが、今までの共同研究のレジメ集である。数年分のレジメ集を参考にヒントを得ている。結婚問題、子育て、男女差別等学生が経験した事のないテーマに関しては、卒業生の協力が役立った（例えばアンケートの協力）。最近

は、メールを使って、外国にいる卒業生の協力も簡単にできるようになった。

b) デメリット

共同研究は、メリットも多い反面、デメリットもある。共同研究が裏目に出ると、学生は何も学習しないことになる。

- 1) 後期の大半の時間を共同研究に割くので、共同研究に興味を持たなかったり、グループ編成などに失敗すると、その学生は、後期は何も学習しないで終わる危険性がある。
- 2) テーマを自分達の関心から決めるのではなく、参考書や資料の有無によって決める場合、研究が深まらない。学生たちはPCの資料や簡単なアンケート調査で満足してしまう傾向がある。よりよい研究ができるように、学生たちに刺激を与えることが重要である。教師が手を抜くと、共同研究の質はすぐ落ちてしまう。
- 3) グループによる研究の差がどうしても出来てしまう。これには幾つかの原因が考えられる。
 - a) テーマが漠然としすぎると短い時間で処理しきれないことがある。
 - b) 研究の内容と学生の興味が結びつかない時には、義務的な研究に終わってしまう。
 - c) グループのメンバーがまとまらない時、分担を決めて個人研究に割り振ってしまい、共同研究とならないで終わってしまうことがある。
 - d) グループ内に強力なリーダーがいる場合、彼女が研究を独り占めしてしまう場合がある。この場合、研究内容は概して高度になるが、グループ内でも理解していないことが多い。
- 4) 共同研究では、学習内容を学生の自主的な活動に任せるので、年間カリキュラムとの調整が必要になる。学生のテーマの選定が偏ると、他のテーマを学習せずに終わる危険性がある。研究発表を11月に終わらせ、12月と1月は授業で調整を図っているが、時には

テーマを残すこともあった。

- 5) 共同研究は、教師にとっても大きなチャレンジである。教師の指導が強すぎると学生の自主性は後退し、研究に意欲を失ってしまう。学生に任せすぎると、研究の質が低くなる時がある。

2. 「参加型学習方法」としての共同研究

本学では、1年生の基礎・教養科目の必修科目「人間学」はクラスを半分に分けた25人から30人単位の編成になっており、5人の教員が担当している。そのうち4人は、10年以上の経験を有する。この5クラスの中で共同研究と合宿の授業形式を採用しているのは私のクラスだけである。本学の開学当初は人間学ばかりでなく、他の授業でも合宿が多かったが、最近では、毎年定期的に合宿をしているのは、人間学だけとなった。

大学の教育方法の改善が叫ばれて久しい。「大学設置基準」の大綱化を機にカリキュラム・制度の改編・改組という問題と共に、大学教育の中心味が問われるようになってきた。学生たちの能力・関心がますます多様化する現代にどのように教えるかは、多くの大学関係者の問題でもある。

このことを考え、大学における授業に関する本を探している時に「学生参加型の大学授業」(D.W. ジョンソン、R.T. ジョンソン、K.A. スミス 共著 関田一彦監訳、2001年 玉川大学出版部)に出合った。私が進めてきた共同研究は、この学生参加型の授業の類型に当てはまることを確認した。この著書の「はじめに」に学生参加型の授業は「大学生の学力を高め、協調的な交友関係をつくり、身体的に健康な学生を精神面でも大学環境に適応させるために、共同学習を活用する方法」であると述べている。

私が行なってきた共同研究も著者が言う「学力を高める」「交友関係」「大学環境になれる」という3つの目標を目指してきた。学力を高めることについては客観的な評価が必要であるが、交友関係と大学の環境に慣

れるという目標に対しては、私の「共同研究と発表合宿」は非常に有効であった。特に短期大学に入学後に1泊2日のオリエンテーションに行きクラス仲間と生活を共にすることからスタートした大学生活で、秋になって再度合宿をするのは、「Eクラスはいいクラス」（私は2000年までEクラスを担当した）という団結となった。グループで一つの事を追求する経験は、2年生になってSJ祭などの実行委員を多く排出する動因となっていると思われる。（2001年のSJ祭実行委員会の主要スタッフはほとんどEクラスであった。）

最後に残る問題は「学力を高める」ことである。同じ著書は、「大学教育の新しいパラダイム」として6点を挙げている。

1. 知識は学生が組み立て、発見し、変形し、広げるものである。
2. 学生は、意欲的に自らの知識を構成する
3. 学生の能力を開発する。
4. 教育は協同して学習する学生同士の、また教員と学生の間の人間的なやりとりである。
5. すべては協同という関係においてしか生まれない。
6. 教育は、理論と研究の複合的応用であり、適当な訓練と技能・手続きの継続的な向上が必要である。

その上、著者は「大学の授業において新しいパラダイムを具現化させる方法が協同学習の利用です。」と述べている。彼らの「協同」の定義は「協同とは、同じ目的のために複数の個人が事にあたること」であり、共同して行なう活動においては、個々人は自分にとっての利益であるとともに、グループ全員にとっても有益な結果を追い求める。」としている。共同研究は、協同で追い求める先が「研究」なのである。

そして、協同学習の基本要素として5点をあげている。

1. 互恵的な相互依存関係
グループ活動遂行のために互いを必要とすることを自覚する。
2. 対面的で促進的な相互交流
学生は助け合い、共有しあい、学びに対する取り組みを励ましあ

うことにより、学習を増進する。

3. 個人のアカウンタビリティ

教員は各学生の学習状況をしばしば査定し、グループと個人に返す。

4. 社会的技能

必要とされる社会的技能を学生が身につけるようにする。

5. 協同活動評価

この基本要素を私達の共同研究の実態に対応して考察すると、全体的には、この諸要素は共同研究の中に洞察され、有効に働いていると思われる。しかし、一番難しいのが3と4の「個人のアカウンタビリティ」と「社会的技能」である。

「個人のアカウンタビリティ」については、グループがしばしば、教師から離れたところで作業をすることがある。(例えば、上智大学や東京の図書館を利用する。)その場合は、教師はグループリーダーと連絡を保つことが出来るが、メンバー個人との接触は難しい。教師が個人との接触を強調すると、グループは圧迫を感じてしまう。個人もグループも自主性を生かしながら、同時に教師が学生の各自の活動を知ることが出来る方法の開発が必要と思っている。

「社会的な技能」に関しては、残念ながら、今の上智短大生はまだ不足していると思う。英語科単科の本学では、学生の質が色々な意味で均一である。「パソコンの神様」もいなければ、英語で資料を探ることが出来る高度の英語力のある学生も少ない。外部からの刺激も少ないし、研究に関する基本的な知識が乏しい。共同研究の為に必要な大きな図書館の蔵書探索の技能もほとんど持っていない。資料の扱い方にはいつも注意を促しているが、実際に資料を扱う段階になると、資料に振り回されてしまう。少子化の問題に20年も前の統計を使ったり、友達10人のアンケート調査で一般化しようとする。最近では、インターネットにとびついて手取早い簡単な資料統計を集めて満足してしまっている。

資料収集の仕方やレポートの書き方などは、人間学ばかりでなく、全

教科目に必要な基本的な技能と思われるので、大学入学の時点で「研究の方法」のような基礎科目授業が欲しい。

3. 今後の課題

私に取り組んできた共同研究は、本学における学生参加型の授業として学生たちに一つの役割を果たしてきたと思われる。この授業が成立したのは、幾つかの条件が整っていたからである。それは、

1. クラスの人数が 25 人から 30 人で、グループ指導に目が行届きやすかったこと。
2. 合宿所がキャンパス内にあり、週日の夜を使って合宿が出来たこと。
3. 共同研究を年間の授業の中で中心的に位置づけられ、事前と事後の準備と整理が可能であったこと。

にまとめられる。この条件が一つでも崩れると、今の形の共同研究を実施していくのは難しくなるであろう。(例えば、上智大学の人間学が数年前より採用した半期 2 単位制の方法では共同研究はできない。)

私は、人間学が通年科目である限り、この共同研究と合宿を継続していくつもりである。本論文を通して反省し見えてきた次の点を修正することにより、学生参加型の授業としてより充実させていくことができると考えている。

1. 前期中に、学生に研究の仕方及びレポートの書き方について説明をし、後期に研究についての基礎的な能力を持つようにする。
2. 学生が社会問題や深みの次元に興味関心を広げることができるような授業を心がける。
3. 学生のインターネット技能を高める。

本学では、2004 年度から 2 年次生のゼミナールが必修科目として導入される。ワーキング・グループの説明では、1 年次の秋からゼミの選択が行われ、ゼミによってはプレゼミ（自主的な準備ゼミ）が開始される

そうであるが、人間学の共同研究の体験が、このゼミを豊かにするよい知的訓練の場となり、学生の基礎・教養教育の要になることを願っている。

参考

1. テキストについて

人間学で使用しているテキストは、4回の改訂が行なわれている
編集代表は上智大学人間学研究室 ハイメ・カスタニエダ教授と井上英治教授である。

- 1) 『人間学入門』1975年3月～ 発行所 理想社
- 2) 『新版人間学』1987年4月～ 発行所 理想社
- 3) 『新人間学』1993年4月～ 発行所 透土社
- 3) 『現代人間学』1999年4月～ 発行所 春秋社

テキストの構成は基本的には変化がないが、時代の特徴をふまえた書き直しが行なわれている。最後の『現代人間学』の目次を掲げると次のようになる。

- I 外側みた人間理解
 1. 人間の由来
- II 内側からみた人間理解
 2. 意識の発達
 3. 意識—内側からみた人間理解
 4. 自由—成熟と喪失
 5. モラル—西洋倫理を踏まえて
 6. 人間の歩むべき道
- III 環境とのかかわり
 7. 自然とのかかわり
 8. 対話
 9. 成熟とエロス
 10. 人間と家庭

11. 人間と国家の関係

12. 国際的連帯性と人間仲間（以前は人間仲間と平和教育）

IV 深みの次元とのかかわり

13. 生と死

14. 宗教と宗教心（霊性）

15. イエス・キリストの人間観

2. 共同研究のテーマ例

3つの年代（1981年、1991年、2000年）の共同研究のテーマを掲げる。わずかではあるが、社会的背景と学生の関心が浮き彫りされる。

a) 1981年

意識

性格

敬語

偏見

友情

社会的人間関係

親子関係

家族

女性について

生きがい

自殺

青年の自殺

中絶

生と死

c) 2000年

自然とのかかわり

愛

愛について

b) 1991年

死に絶える動物たち

環境破壊

現代の若者の性に対する意識

家族・家庭について

家庭について

離婚

国際人になりたがっている日本人

部落の現状

ガン告知

私達にとって宗教とは

現代の死について考える

幸せな家庭の事情
理想の子育ての仕方
犯罪をおかした子供に対する母親の影響
神戸小学生殺人事件の背景と教訓
現代の少年犯罪の傾向
しょうねん
日本・アメリカ 少年犯罪の比較
日本の死生観
脳死と臓器移植
生と死～尊厳死～
生と死

参考文献

- ・『人間学共同研究』1977年～2002年
羽場が担当したクラスの共同研究のレジメ集を毎年冊子として製本している。羽場研究室に保管
- ・『大学改革』「21世紀の自然科学系大学教育に向けて」編集委員会編
1994年 朝倉書店
- ・『大学授業の技法』赤堀侃司著 1997年 有斐閣
ここには参加型体験学習方式の体験例が紹介されており、参考になる。
- ・『かわりの人間学』上智大学人間学研究室 2002年
新しく2単位用のテキストとして編集された。“関わり”の視座を広げるため学生たちには役に立つと思われる。